北東部ブラジルの漁村「エステーバン村」における コミュニティ・ツーリズム試案

小貫大輔[*1]・高橋沙織[*2]・Iana B. O. V. Lima[*2]・Diego T. de Araújo[*2]
・Edson V. da Silva[*3]

はじめに

20世紀中頃までは，度重なる干ばつに襲われ苦しんだ貧しいブラジル北東部であるが，今日そこには，手つかずの自然や伝統的な生活様式などのエキゾチックな魅力を求めて多くの観光客が訪れる。しかし，そういった観光業の発展は必ずしも地元住民に経済的な利益をもたらすわけではなく，かえって身の周りの環境破壊や伝統文化の衰退が進み，麻薬や売春といった手におえない新しい社会問題の到来を意味することもしばしばである。ホテルや観光サービスを営むのは，ほとんどの場合が資本を所有する外部からやってきた企業や個人で，地域の不動産価格が上昇することで土地の売買が進むことから，もともとの住民が住む場所を追われる結果ともなる。そのような状況に鑑みて注目されるようになったのが，コミュニティ・ツーリズムという考え方である。

コミュニティ・ツーリズム（ポルトガル語： turismo comunitário，英語： community-based tourism）とは，地元住民が主体となって直接運営に関わり，地域の自然，社会，そして文化を考慮しながら計画的に観光活動を実施し，コミュニティの経済的発展と共に自然保護，伝統文化の継承を図る「持続可能な」観光サービスのあり方である。Lucchetti & Font（2013, p. 2）は，主流の観光のあり方が途上国から利益を吸い上げネガティブなインパクトをもたらすことに対抗するオルタナティブとして「30年程前から国際機関によって注目されてきた」のがコミュニティ・ツーリズムであると述べている。Borge（2011, pp.38-39）は，地域の自然体験，伝統文化体験，食文化だけではなく地域の人々との文化交流など普段の観光ではできない経験をすることがコミュニティ・ツーリズムの魅力だといい，Giampiccoli & Kalis（2012, p.174）は，そのような観光を住民が主体となって作っていくことが貧しいコミュニティの組織化につながり，自分たちの伝統文化を観光客に伝えることが住民のアイデンティティの存続にも繋がるという。Scheyvens（2011, p.37）は，「貧しい人の利益となる観光業」という視点から，「参加，

提出日2015年9月24日　　受理日2015年11月25日
＊1東海大学教養学部国際学科教授＊2セアラ連邦大学開発と環境学研究科前期博士課程
＊3セアラ連邦大学開発と環境学研究科及び同大学地理学部教授

公正，ジェンダー，エンパワーメント」という考え方を重視するオルタナティブな社会開発のアプローチ，そして持続可能な生業の立て方の推進を提唱している。

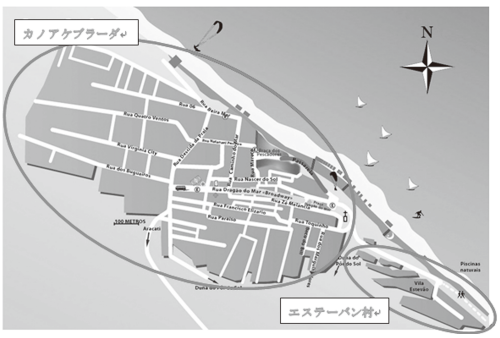
本論文では，ブラジル北東部の海岸地帯を舞台にして，ある小さな漁村をケーススタディとして取り上げ，コミュニティ・ツーリズムの発想がこの村の持続可能な発展のためにいかに役立てられるのかについて考察したい。筆者たちは，村の住民たちとの共同作業でコミュニティ・ツーリズムの計画を作成することを目指しているが，本研究では，その準備段階としてこの村に存在する観光サービスの現状について調査し，社会，経済，文化の観点からその特徴を理解し，この村でコミュニティ・ツーリズムを実現していくことの可能性と限界について考察する。

計画の策定に当たっては「ランドスケープ・ジェオエコロジー」という方法を用いるが，その最初のステップとして，まずエステーバン村を自然面と文化面から把握する他，観光インフラ及びサービスの現状，コミュニティと住民の構成，そして住民の観光に対する見方などを分析する。本論文では，そこまでの結果を報告するが，次に第二のステップとして，そのようにして得られた情報を元に現状の観光活動のもたらす利益や影響について住民と共同作業で診断する計画である。観光業のネガティブな側面にも目を向け，住民と一緒に持続可能な観光活動の必要性について考える重要なステップである。最終的には，その結果に基づいて村の「ゾーニング地図」を作成，エステーバン村におけるコミュニティ・ツーリズムの計画を作成するまでの全体を「ランドスケープ・ジェオエコロジー」の方法論に従いながらおこなう計画である。

エステーバン村の概要

ブラジルの北東部に位置するセアラ州は，大西洋に面した500km にわたる海岸線沿いに白砂の美しいビーチが並び，大規模な白い砂丘や浸食によって複雑な地形を呈するファレージア（Falésia：砂でできたもろい崖，砂壁）や，昔ながらのジャンガーダ（伝統的な帆掛け船）漁など，豊かな観光資源に恵まれる。本論でケーススタディとして扱うエステーバン村は，州都のフォルタレーザから海岸沿いに180キロメートルほど，車で 3 時間ほど東に行ったアラカチ市（人口およそ 7 万人，南緯 4 度のほぼ赤道直下の町）の中にあり，有名な観光地であるカノアケブラーダに隣接する。カノアケブラーダは，1970年代にヒッピーたちに発見されて有名になった漁村で，今日でもヒッピー文化の色合いを残しながら国内外から多くの一般観光客を受け入れる観光地である。

エステーバン村はカノアケブラーダから500m も離れない隣村であるが，特殊な事情から環境保護区の指定を受けたことが大きく影響して観光開発が遅れ，今日でも伝統的な漁業が守られ，伝統工芸が受け継がれている。エステーバン村でも観光客の宿泊を受け入れているが，保護区の規定上，宿泊施設の建設は認められず，宿泊先は村人の家の一室であったり，敷地内に建てられたバンガローであったりして，食事も小規模の食堂やパン屋が利用されていることから，漁村としての外観が保たれている。村には環境問題に取り組む非営利団体が活動していて，砂丘のネイチャー・ツアーを行うなどして隣接するカノアケブラーダとは異なった観光体験を



カノアケブラーダとエステーバン村の位置関係（地図は Pousada Presidente Hotel の HP 提供画像を筆者が加工したもの）



村の海岸風景：ファレージア（砂の岸壁）と伝統楽器を手にする若者（写真は小貫大輔が撮影）

提供している。

エステーバン村周辺の観光資源

エステーバン村は，アラカチ市という人口７万人ほどの自治体の中に位置し，市の中心部までは車で15分ほどの距離にある。アラカチとは先住民（インディオ）の言葉で「よい風」を意味し，その名の通り毎日夕方になると海側から内陸に向かう強い風がこの地域一帯を吹きぬけて熱帯の暑気を吹き払い，人々を寝苦しさから解放する恩恵をもたらす。風の恩恵は，乾燥肉や塩を生産する産業も生んできた。アラカチ市は，カノアケブラーダをはじめとする美しい海水浴場，広大な白い砂丘，砂丘の中に点在する湖など，豊かな自然環境に恵まれるだけでなく，18世紀に遡る教会などの文化遺産や，州を代表するカーニバル行事などの魅力が溢れ，毎年多くの観光客が訪れる。2000年には，ポルトガルの植民地時代の面影を残す町並みが IPHAN（Instituto do Patrimônio Histórico e Artístico Nacional）というブラジル国内の歴史と芸術の遺産を扱う組織に文化遺産として認定された。

セアラ州観光局のコーディネーターによると，アラカチ市の中には88箇所の宿泊施設が存在するが，その大多数（61箇所）はカノアケブラーダ地区に所在するとのことである（2010年実施の調査の結果： Teobaldo da Silva 氏による）。市街地より海岸の宿泊施設の方が人気なのは，海や砂丘へのアクセスのためもあるが，海岸部の方が夕方の「アラカチ（よい風）」を直接受けることができて間違いなく涼しいことも大きな理由であろう。レストランやバー，クラブ（ダンス場）などの夜の遊び場もカノアケブラーダに集中する。

かつてカノアケブラーダとエステーバンは隣接する二つの漁村であり，アラカチ市街から見て大きな砂丘の反対側（海側）に隠れたひなびた村に過ぎなかった。今日，アラカチ市街からカノアケブラーダやエステーバンまで行くには舗装された道を通ることができるが，30年ほど前までは二つの村と市街地との間には道もなく，それらの村に入るためには，５km ほど離れた隣の漁村から潮の引いたときに海岸沿いに歩くか，陸側から砂丘を頂上まで登り，海側の村まで降りるかしかなかった。そんな「秘境」を訪れるようになった最初の観光客たちは，1970

年代のヒッピーたちだった。ヒッピーに続いて芸術家やインテリ階層の若者たちが好んで訪れるようになり，1980年代までにはブラジルの最もエキゾチックな観光地の一つとして知られるようになっていった。

今日，カノアケブラーダの村は外部から住み移った人たちによって大きく肥大し，61個所という多くの宿泊施設を持つ観光地に変わり，今でもその開発は続いている。1990年代のはじめにはカノアケブラーダに続く砂地の道が砂丘を回り込む形で開かれ，90年代の終わりまでにはその道がアスファルトで舗装されるにいたった。カノアケブラーダの中心には「ブロードウェイ」と呼ばれる500m ほどのメインストリートができて，その両側にレストランやバー，クラブ，土産物店などが並ぶ。宿泊施設の多くは，そのメインストリートから海岸までの風通しがよく景色もいいところに建てられている。

カノアケブラーダを訪れる観光客は，もちろん多くの時間を海岸で海水浴をして過ごすが，その他に人気の観光サービスとして「ブギー」と呼ばれる砂地用の車によるツアーがある。運転手が砂丘の斜面をブギーでスリルたっぷりにかけまわり，遠くの海岸や砂丘の中の湖まで連れていって休ませてくれるものだ。近年は海からの強い風を利用したパラグライダー体験も人気である。徒歩で砂丘を上って夕陽を眺めるだけでも，海と緑の大自然に二分された360度のパノラマが訪れる人の心を奪う。

近隣の観光地の抱える問題

Silva（2013, p.80）は，その修士論文でカノアケブラーダの観光化の過程を取り上げ，1980年代にカノアケブラーダで観光活動が始まった当初，アラカチ市街地につながる道路や，電気・水道・電話などのインフラの不備が自然や社会環境を守る働きをしたと述べている。当時，村を訪れる者は，地元住民の家にホームステイのような形態で宿泊し，伝統的な漁業を生業とする村の男性たち，伝統的な工芸品を作る女性たちと交流することを楽しむ暖かな空気があったという。そんなカノアケブラーダにも1986年には電話線が繋がり，1990年には電気と水道がつながった。やがてアラカチ市街地を経由して州都フォルタレーザまでつながる道路もできて，すでに述べたような爆発的な観光開発がおきるにいたる。

小さな漁村からブラジルでも指折りの観光地へと発展したカノアケブラーダは，あまりに急激かつ無計画に観光化が進展したため，様々な社会問題を抱えるにいたった。古くからこの地域に住む漁師たち，特に若者たちの間では伝統的な漁法や民芸品，工芸品作りなどの伝統文化への関心が薄れ，観光業の影響で治安が悪化した他，貧富の差が拡大するなど，様々な問題が生まれている。そもそも，カノアケブラーダを訪れると宿泊施設や観光サービスのオーナーがもともとの村民ではなく，外部からの移住者であることに圧倒される。外国人のオーナーも少なくない。ブロードウェイから海岸までの風通しのよい海を一望する地域は，そういった外部者の所有となってしまって，1980年代にはそれらの土地を所有して，ときに小さな商店やレストラン，職泊施設なども開いていたもともとの村民は，現在はブロードウェイより陸側の貧しい地域に住んで，観光業の末端で従業員として働いているのがほとんどである。夜のブロード

ウェイは一種歓楽街の様相を呈し，観光客以外にも近隣の町々から集まる人々が毎日朝方まで騒ぐことができるようになっている。「恋愛」と「売春」の線引きの難しい出会いを求めて，様々な年齢の女性が集まる場所でもある。

観光地化が始まってからの自然破壊の問題も顕著だ。砂丘の上に大きな宿泊施設やその他の観光施設が建築されて，雨水や下水などの都市廃水が海に流れ込むようになったことから，観光施設と海岸との境界に位置するファレージア（砂壁）が大規模に損傷して観光施設そのものが崩れ落ちたり，ブギーと呼ばれる砂地用の車両が砂丘を縦横無尽に行き来するようになって，砂丘の位置が変動したり，生態系が崩れたりするなどの問題がおきている。

エステーバン村の歴史

エステーバン村は，前項で述べた観光地カノアケブラーダの中心部からわずか徒歩10分ほどの距離にあるが，カノアケブラーダとはかなり異なった歴史をたどってきた。そもそも異なった血族の住む二つの異なった村であったこともあるが，決定的な違いは1980年代におきた大きな事件とその解決策となった「環境保護区」指定にある。

カノアケブラーダが古くから人の住む漁村で，17世紀の史実にも登場するのに対して，エステーバンに人が住むようになったのは1930年代のことだ。現在村に住む年長者たちの祖父（高齢者の女性たちから見れば父親）にあたるエステーバンという人が，17人の子どもを連れて海岸沿いに歩いてこの地に辿り着き，砂丘の麓に住み着いたことが始まりだとされる。その場所には当時既に別の家族が住んでいたが，エステーバン一家が最も多くの子孫を残したことから，村は「エステーバン村」と呼ばれるようになった。エステーバン氏のファミリーと他のファミリーが相互に婚姻して子どもを作り，ときには旅人と婚姻して子どもを作り，現在は76家族が住む村となっている。

1970年代から1980年代にかけて「秘境カノアケブラーダ」が「発見」されると，当然，エステーバン村にもヒッピーやアーティスト，知識層などの観光客が流れつくようになった。エステーバン村の住民はカノアケブラーダから見ても差別の対象となるほど貧しかったが，当時村を訪れた人たちは，その「原始的な」生活様式のゆえになおさらエステーバン村を愛した。そんな中，巻き起こったのが開発業者によるエステーバン村の「のっとり事件」であった。

この開発業者は，エステーバン村が「流れ者」の作った歴史の浅い村で，そこに住む村民たちは正式に土地を所有していないことに目をつけた。引っ張り出してきた古地図を根拠に所有権を主張する古い家系の人たちが現れ，開発業者はエステーバン村の住民に立ち退きを要求。隣の海岸から海岸沿いにつながる道をつけて柵をたてるなどして強引に開発を進めた。村人たちは当然開発業者に抵抗したが，村人と力をあわせて抗議行動に出たのが，村を訪れるヒッピーやアーティスト，知識層などの観光客だった。エステーバン村を応援する市民たちは，全国ニュースでも報道されるような抵抗運動をはじめ，その運動を応援するミュージシャンたちが州都のフォルタレーザでチャリティコンサートを開くなどした。

最後には，州知事が仲裁に入ることで決着がついた。エステーバン村の所有権を州が権利者

から買い取り，この村とその周辺の地域を「環境保全地区」に指定したのだった。その結果，今日では村人以外が婚姻以外の理由で新しく村に移り住むことが禁止され，新たな建物の建設も村の子どもが独立してそこに住むために建てること以外は禁止されている。

開発業者との闘いの中で，エステーバン村の住民たちが「エステーバン住民協会」を創設したことは特筆に値する。今日，環境保護地区としての村の運営は，選挙で選出される住民協会の理事たちによっておこなわれている。

エステーバン村の住民構成

本研究では，セアラ連邦大学の大学院生３名と教授１名がエステーバン村を訪ね，アラカチ市保健局のファミリー・ヘルス担当部署が管理するデータを元に調査をおこなった。また村の観光サービスに関しては施設を一軒ずつ訪ね情報を集めた。以下は，その結果わかったことである。

現在エステーバン村には313人が在住しており，154人（49％）が男性，159人（51％）が女性である。年齢別に見ると子ども（０-12歳）が61人（19％），青少年（12-18歳）が45人（14％），大人（18-60歳）が185人（59％），高齢者（60歳以上）が22人（0.8％）である。

職業別に見ると，未就学児・幼稚園児55名および，小学生から大学生までの児童・生徒・学生90名を除く168名の村人のうち，観光業に携わるものが55名と最も多く，続いて専業主婦が24名，漁師が19名，年金受給者が18名，幼稚園を含む学校の教師が９名，アーティストが６名，商業を営むのが３名，大工が３名，料理人が１名いた他，30名がその他の職に就いている。漁師の村という印象の強いエステーバン村だが，実際には観光業に従事する者が一番多く，学生を除いた成人の約30％にものぼる。隣接するカノアケブラーダの観光開発の影響も大きいが，自然環境に左右されて不漁が何年にもわたって続いたことも影響して，漁業を続けるものが急減したという。観光業の内訳は，ホテル従業員，レストラン給仕，ガイド，運転手などで，観光施設に雇用される者が大部分であり，年間を通して固定的に雇われる者だけでなく，人手が足りない観光シーズンに限り働きに出る者も多い。

村人の経済レベルであるが，個人の単位でみると最低賃金未満の収入の者が67名，最低賃金以上，最低賃金の２倍未満の者が79名，最低賃金の２倍以上，４倍未満が１名，最低賃金の４倍以上が２名となっている。家族ごとの収入を見ると，最低賃金未満で暮らす家族が19家族，最低賃金以上，最低賃金の２倍未満が42家族，最低賃金の２倍から４倍が12家族，そして最低賃金の４倍以上が３家族となっている。

エステーバン村の観光資源

エステーバン村は環境保護区に指定されていることから，ホテルなどの大型宿泊施設の建設は認められていない。村には観光客が宿泊することのできる施設があわせて29施設存在するが，その内７施設は一軒家であり，16施設はコテージの形をとっていて，６施設はファミリーが家

の中の一室をあてがう形で観光客を受け入れている。近隣のカノアケブラーダにはホテル形態の宿泊施設が多数あるのだが，あえてエステーバンで宿泊する観光客は村人と近しくつきあえる環境を求めてのことであるといえる。村に泊まった観光客はカノアケブラーダや，海岸のレストランで食事をすることもできるが，宿泊先の村人に頼んで食事を作ってもらうことも多い。村の中には，海産物を使った伝統料理を出す食堂が1軒ある。村の入り口には日本のNGOの支援で2007年に建てられたコミュニティセンターがあって，その一角に村の女性グループが作成したバッグやアクセサリー類を売る売店があるほか，2013年にはパンを焼いて売る店もオープンした。このコミュニティセンターは村人や観光客たちにとっても憩いの場となっている。

エステーバン村のすぐ目の前は海である。村と海岸のビーチの間には赤い砂岸の壁が続き，村を海抜20mほどの高台に支えている。カノアケブラーダに近い側のビーチにはたくさんのバラッカ（「海の家」風のレストラン）が並ぶが，エステーバン側には一軒のバラッカがあるばかりで，海水浴の観光客もまばらだ。その代りに，村の子どもたちが海岸に群れて遊んでいたり，浅瀬で漁師が投網を投げていたりする。村の漁師はジャンガーダという手作りのシンプルな帆掛け舟で漁に出るが，舟が戻る時間には海岸にたくさんの人が集まってきて舟を浜にあげるのを手伝い，獲れた魚が漁師の間で分けられ，仕入れにきたレストラン関係者が値段を交渉して買い上げていくのを見守る。

村の後ろには白い砂丘が立ちのぼる。海抜100mほどの砂丘の頂上まで村の子どもたちと一緒に登り，夕陽が海とは反対側に広がる低灌木の森のはるか彼方に落ちるまで遊ぶことも観光客の楽しみだ。村の青年たちほとんど全員がこの砂丘を「バク転」しながら下まで降り切ることができる。子どもたちは，スノーボードのような手製の橇に座って砂丘をすべりおりて遊ぶ。

村では，村人たちの主催で毎年6月にフェスタジュニーナと呼ばれる伝統文化の行事が開かれ，9月にはジャンガーダの競技大会が開かれる。そのような際には，多くの観光客が訪れてにぎわう。村の中には，「レシィクリアンサ（Recicriança）」という環境教育の非営利団体が拠点を置いて，一年を通して砂丘や海辺の生態系の理解を深めることを目的としたエコツアーを実施していて，アラカチ市の内外から学校や市民グループが参加する。

結論

エステーバン村は，カノアケブラーダに隣接するにもかかわらず，環境保護区に指定されたことが大きく影響して，いまだに昔ながらのコミュニティの姿を残していることがうかがえた。他方，村に暮らす成人の多く（およそ30%）が，カノアケブラーダの観光活動で働くことで収入を得るようになっているのも事実であり，しかも，それらの人たちの収入は大部分が最低賃金未満または最低賃金の二倍未満であって，あくまでも観光業の末端に位置付けられていることがよくわかる。観光シーズンの期間にのみ雇われるものが大部分でシーズンオフには収入が途切れてしまうことや，観光業にかかわることで若者の漁業離れが進んでいることも，エステーバン村の住民の生活に不安な影をおとしている。カノアケブラーダがブラジルを代表するような観光地だとはいっても，そのことの利点がわずかしか地元住民に還元されていないことが

よくわかる。

カノアケブラーダの観光による発展が，直接的な形でエステーバン村を潤しているとは言い難い一方，エステーバン村はエステーバン村で，カノアケブラーダとはまったく異なった独特の形で観光との接点をもっていることもよくわかった。カノアケブラーダの持つ「観光地」の匂いを嫌って，素朴な村人との出会いや，伝統的な生活様式，手つかずの自然を求める来訪者が，それなりに村人の生活を尊重し，村に溶け込む努力をしながら滞在する形の観光が続いてきたからだ。1970年代，1980年代にヒッピーたちがカノアケブラーダを発見したときのような雰囲気が今でも残っているといってもいいだろう。筆者たちは，そんなエステーバン村の在り方に持続可能な観光の形への可能性を強く感じることができた。

それでは，どうすればエステーバンの村でコミュニティ・ツールズムを実現することができるのだろうか。これまで多くの研究者たちがコミュニティ・ツーリズムの要は地元住民が参加し決定権を所有することにある点を強調してきた（Lopez-Guzmán, Sánchez-Cañizares & Pavón, 2011, p.70）。その点，エステーバン村で注目されるのが，村に住民協会が存在するという事実である。1980年代の観光開発業者との闘いの中から生まれ，州知事によって環境保護区として指定されてからは保護区の運営を担う組織として機能してきた。その代表者グループ（理事会）は，定期的におこなわれる選挙によって民主的に選出されている。住民協会はその規約の中で，村民の土地と村の伝統的な文化の保全・保護と継承を目的に掲げている。この住民協会のメンバーたちも，本研究で実施したインタビューを通してコミュニティ・ツーリズムについて説明を受け，少なからず興味を示した。エステーバン村でコミュニティ・ツーリズムを実現できるとしたら，住民協会が何らかの役割を果たすことができるのではないだろうか。

この村では，土地の「保全・保護」というとき，文字通り積極的な「保全・保護」の行動が必要とされる。つまり，この村は大きな砂丘の麓の砂地の上に成立している村であるために，砂丘そのものが移動して村の土地を飲み込んでしまう可能性があるのだ。セアラ州の砂丘には，常に変動を続ける「移動型砂丘（duna móvel）」と，木や植物が根を張ることによって変動が限られ安定している「固定型砂丘（duna fixa）」の二つの状態が存在する。エステーバン村の裏にそびえる砂丘は「移動型砂丘」であり，近年もすそ野が少しずつ村側に向かって広がってきていて，砂丘と海岸線のファレージア（砂の岸壁）の間に位置する村の土地が狭くなっていることが観察されている。

エステーバン村の裏の砂丘の移動に影響を与える人的行為として，観光用のブギーの激しい往来の害が以前から取りざたされてきた。村の裏側を絶え間なくブギーが往来することで，植物が育たなくなって砂丘そのものが海に向かってゆっくりと広がりつつある問題が一つだ。砂丘には果物がなる木や，かまどでおこす火の燃料となる乾いた枝を提供する低灌木など，伝統的な生活に欠かせない植物が豊富に存在していたが，ブギーの往来によって植物の茂る場所が減退を続けている。ブギーの重みによって道が形成されることも砂丘の変動を加速させている。村の海側では，さらによく目に見える問題が生まれていて，村と海とを隔てる高さ５m ～20m ほどのファレージア（鉄分を含んで赤い砂岩の岸壁）が，ブギーの往来によって破壊されてしまっているのだ。歯が抜けたようにあちこちに穴の開いたファレージアの隙間から海風が吹き

付け，砂浜から砂が家々を襲う。隙間と隙間の間に残ったファレージアも，しばらくするとごそっと崩壊して岸壁のラインが５ｍほど後退する。そのたびに村の面積が減ってしまうことから，海に近い家から順番に砂丘寄りの側に再建を余儀なくされる。

そんな中，エステーバン村の住民協会は，これまでに何回もブギーの往来を禁止する決定をくだしてきた。特に，カノアケブラーダのブギーが村の入り口で少年をはねて大きな怪我をさせたときは，村に続く道をバリケードでふさいだほどだった。しかし，いつの場合も最後には，なし崩し的にブギーの往来が再開されて，結果として住民協会は村の「土地」を守れないできた。村全体の利益であるはずの「ブギーの往来の禁止」が，住民協会の決定があってすら継続できないのはなぜであろうか。その最たる理由は，エステーバン村の中で村人の手でおこなわれる観光活動が，すべて個人の活動としておこなわれていることにあるようだ。やはりブギーは便利な乗り物であり，村を訪れる観光客にとっても，村の入り口から数百メートルも歩いて大きなカバンや食料品などの荷物を担いで歩くのは不便に感じられる。村全体の取り決めがあっても，観光客の受け入れの主体が個人である限りは，なかなか観光客に不便を強要できないのが現実なのである。

そのような困難な状況を解決する一つの道として，筆者グループは住民たちが協力して観光の在り方を計画，運営するコミュニティ・ツーリズムという方法を提案したい。その主体として有力視されるのが，エステーバン村の住民協会の存在である。Lopez-Guzmán, Sánchez-Cañizares & Pavón（2011, p.72）は，他国でのコミュニティ・ツーリズムの研究で，旅行会社や非営利団体，あるいは大学とコミュニティが協力体制を築くことから成功した例をあげているが，エステーバン村でも，住民協会が村全体の観光業活動の管理・運営をおこない，非営利団体や大学などの教育機関と協力体制を築くことができればコミュニティ・ツーリズムへの道が開けるのではないだろうか。今後，本研究の第二段階の取り組みとして，住民協会のメンバーと一緒に村の現状を分析していく計画である。

村に拠点を置く環境問題に取り組む非営利団体「レシィクリアンサ（Recicriança）」の存在も重要だ。この団体は村の子どもたちに環境教育をおこなうことを目的に30年近くも前に生まれたものだが，近年は砂丘と海を案内するエコツアーを実施して活動が広がっており，村の青少年をエコツーリズムのガイドとして育成することが出来るだろう。コミュニティ・ツーリズムが村にもたらすのは経済的な利益のみではない。まとまりに欠けたコミュニティが，コミュニティ・ツーリズムの運営を通じて連帯意識を持つことで，地域の組織化や地域活動の活性化といった社会的な利益をももたらすことが期待できる。

難しいのは，これまでコミュニティ・ツーリズムの経験のないエステーバン村の住民協会が，組織として村とその周辺の観光活動を管理・運営し，現在すでに観光活動を提供している村の個人の利益を損なわない形でのシステム作りをしていくことである。そのためには，持続可能な観光に関して村人たちの意識を高める働きかけが欠かせない。セアラ州には，州の海岸線沿いでコミュニティ・ツーリズムを実施するコミュニティのネットワーク組織「レデ・トゥクン（Rede Tucum）」が存在する。現在，15のコミュニティが参加するこの組織は，コミュニティに観光活動を管理運営する地元住民の組織が存在することを条件に，それら組織のメンバーに

向けたワークショップを開催して，観光業の計画や運営方法の確立，利益の平等な分配に関するトレーニングを提供している。このネットワークへの参加も視野に入れて，エステーバン村の住民協会がコミュニティ・ツーリズムの主体となることはできないか，本研究の今後のステップで検討していきたい。

おわりに

20世紀の中頃までは，度重なる干ばつに襲われて多くの人が飢えて死ぬこともあった貧しいセアラ州であるが，今日，エキゾティックな観光の目的地として国内・国外から多くの観光客が訪れるようになった。しかし，観光を受け入れる側のコミュニティにとって，計画性に欠けた観光開発は様々な環境問題や社会問題を引き起こし，必ずしも観光業の発展の恩恵を享受しているとはいえない状況がある。本研究では，エステーバン村という人口300人余りの小さな漁村と，その隣村でブラジルでも著名な観光地となったカノアケブラーダでおきていることを詳しく見てきたが，まさにそのような状況を目の当たりにすることになった。

筆者たちはコミュニティ・ツーリズムという持続可能な観光活動のあり方に注目して研究してきたが，筆者たちが提案するのは，伝統的な生業と観光業を置き換えることではなく，伝統文化の継承と観光業のメリットを融合させることにある。コミュニティ・ツーリズムでは，コミュニティの特徴にあわせて観光活動の形や観光客に提供する体験が異なるため，それぞれのコミュニティの自然環境，社会環境，伝統的文化などを理解し，可能性と限界を分析した上で長期的な視野をもって持続可能な形での観光計画を提案する必要がある。今回の調査で，エステーバン村には，その独特の歴史的経緯のためにコミュニティ・ツーリズムを推進するために有利な条件がいくつも存在することがわかった。この村では今でも伝統的な漁業が続けられていると同時に，観光客を受け入れてジャンガーダの乗船体験・漁業体験をさせたり，伝統文化のお祭りに外部の人を多く招待するなどの素朴な観光活動も盛んである。そういった活動は村人にゆとりとしての収入源を提供するために，かえって伝統的な生活形態を保持することを可能にする側面も見受けられた。

現状ではコミュニティ・ツーリズムを組織的に管理運営していくシステムを欠くエステーバン村だが，村の住民協会がその主体となることができれば，持続可能な観光に関する意識を村人の間で強化し，地元に利益を還元しながら村の土地と自然を保護し，伝統文化の継承が促されるような形での持続可能な観光のあり方を実現できるのではないだろうか。

参考文献

Borges, C.I.O.S.（2011）*Turismo Comunitário em Comunidades Tradicionais na Zona Costeira do Ceará: Em foco experiência da Rede Tucum*. 140f.（Master's Thesis in Geography）, Universidade Federal do Ceará, Edições UFC.

Giampiccoli, A. & Kalis, J.H.（2012）"Community-based tourism and local culture：the case of the amaMpondo"，*Pasos: Revista de turismo y patrimonio cultural*, Vol. 10, Issue 1 , Laboratorio de Antropología Social, pp.173-188.

López-Guzman, T., Sánchez-Cañizares, S. & Pavón, V.（2011）“Community-based tourism in developing countries：A case study”, *Tourismos: An International Multidisciplinary Journal of Tourism*, Vol. 6 , No. 1 , pp. 69-84.

Lucchetti, V.G. & Font, X（2013）*Community Based Tourism: Critical Success Factors*. The International Centre for Responsible Tourism, ICRT occasional paper, No.27.

Scheyvens, R.（2011）. *Tourism and Poverty*, Routledge.

Silva, L. G. M.（2013）*A vila do Estevão e a Dinâmica do Turismo em Canoa Quebrada-Aracati（Ceará）: Cultura, Território e Atividades Econômicas*. Dissertação（Mestrado em Geografia）. Universidade Estadual Paulista Julio de Mesquita Filho. São Paulo.

Abstract

Planning Community-Based Tourism for the Vila do Estevão, a Fisherman's Village in Northeast Brazil

Daisuke Onuki, Saori Takahashi, Iana B. O. V. Lima, Diego T. de Araújo and Edson V. da Silva

Objective： Community-based tourism gives a hopeful alternative to mass-tourism particularly in developing countries. The authors plan to develop, in cooperation with the villagers, a roadmap for community-based tourism of Estevão Village, an environmental preservation area within Aracati City of the State of Ceara in northeast Brazil. As the preliminary phase of the planning, we present the current situation of the tourist services that take place in this village, try to understand the village's characteristics from social, economic and cultural viewpoints and discuss the feasibility of the community-based tourism in the village. Results： Among the adults living in Estevão Village, about 30% are engaged in services related to tourism. At the moment, there exist 29 places for tourists to stay； among which 7 are houses for rent, 16 are cottages attached to the villagers' houses and 6 are rooms for rent within villagers' houses. There are one local-cousine restaurant and one bakery catering to tourists, as well as a kiosk where bags, accessories and other goods handmade by members of a group of village women are sold. Some fishermen provide tourists with opportunities to take a ride on their fishing boat, called *jangada*, and a not-for-profit organization based in the village offer eco-tours for tourists as well as for local schools to visit local dunes and beaches to learn about the nature and ecology of the region. Conclusion： At the moment villagers of Estevão Village are engaged in tourist services personally and independently without any organized coordination among them. The authors emphasize the benefit of organizing community-based tourism by creating a system to manage tourism through collective decision-making and responsibility-sharing. The Associação dos Moradores de Estevão（AME-Residents' Association of Estevão）, a legitimate entity composed of democratically elected board members, could play an important role in managing community-based tourism in Estevão Village.